

第V部 総括

八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題

杉井 健

はじめに

八代海は、九州島の西側にある内海である。その東と南は九州島、北は九州島中位から西にのびる宇土半島、西は南北に連なる天草諸島によって囲まれている。本書第I部でも述べたように、八代海沿岸地域はその内部に前方後円墳築造域の南西端を内包するから、古墳をさかんに築く社会とそうではない社会との接触域にも相当する。したがって、そこは日本列島における国家形成過程を考察するうえできわめて重要な地域の1つであることは間違いない。そうした視点のもと本共同研究を進めてきたのであるが、最後に私の関心にもとづきながら、当該地域における古墳時代在地墓制の特質とその問題点について若干の検討を行い総括としたい。

八代海沿岸地域の在地墓制にかんする諸問題

古墳時代前期の八代海沿岸地域 熊本県地域における前期古墳では、宇土半島基部地域に所在するものが全国的にもよく知られている。たしかに前方後円墳がさかんに築造されている点で、古墳時代前期において宇土半島基部地域はきわめて有力な地域である。しかし、その南に位置する八代平野や芦北地域も忘れてはならないと思う。

本書第I部でも記したが、出土古墳は不明ながら八代から芦北にかけての地域で3面もの舶載三角縁神獣鏡の出土が知られているのである。熊本県出土の三角縁神獣鏡は4面のみであるから、じつにその4分の3に相当する。また、八代平野の中央に位置する有佐大塚古墳で、手慣れた製作者によるものと考えられる円筒埴輪が採集されている点も見逃せない。加藤一郎によって「畿内の資料と対比させることも可能な資料であり、川西編年Ⅱ期に位置付けることができる」（加藤2008：p.236）と評価されているが、宇土半島基部地域の向野田古墳にみられるきわめて在地色の濃い円筒埴輪とは一線を画す資料である。さらに、八代市大鼠蔵山の頂部に位置する楠木山古墳も注目すべき存在である。なぜなら、その主体部は長さ4.6mの竪穴式石室で、そこからは碧玉製紡錘車や鉄剣、鉄鏃などが出土しているのである（池田1986）。また同じ大鼠蔵山には、石障系横穴式石室を内部主体とする大鼠蔵尾張宮古墳が築かれており、当該地域における埋葬施設の古墳時代中期への展開過程を考察するうえでも楠木山古墳は重要な位置を占めている。つまり、資料の存在が広く知られていないこともあって、これまで古墳時代前期の八代平野や芦北地域はそれほど大きく取り上げられてこなかったが、宇土半島基部地域に並ぶ重要な地域として注目に値するのである。むしろ、前方後円墳築造域の最南西端という意味では、八代平野部の検討が今後ますます重要となってこよう。

なお、古墳時代前期においては、天草諸島やその周辺で、墳丘をもつような有力な古墳がほとんど築造されていない点にも十分な注意が必要である。宇土半島西端に位置する清水甲古墳の箱式石棺からは筒形銅器が出土しているが、その付近の清水乙古墳の箱式石棺では詳細は不明ながら甲冑片が検出されているから（角田1918）、いずれも古墳時代中期に下る可能性があるだろう。したがって、中央政権との関連がうかがえる要素に着目すると、前期においては、同じ八代海北部沿岸地域とはいえ、

天草諸島よりも九州島側の八代平野から芦北地域の方が有力であるといえるのである。

古墳時代中期の八代海沿岸地域 古墳時代中期は、八代海北部沿岸地域がその個性をもっとも発揮する時期である。石障系横穴式石室や装飾古墳の存在がそのことを端的に表している。また、おそらく古墳時代前期後半段階においても、天草産砂岩製の箱式石棺を築くなどの点で八代海の北部沿岸地域はつよいつながりを有していたと思われるが、中期になると石障系横穴式石室の登場によってそのことがより明確になる。さらに重要なのは、本書第Ⅱ部で検討したように、天草諸島の北部地域にまで帯金式甲冑や窖窯焼成の埴輪など、中央政権との関連がうかがえる要素が広がることである。つまり、在地の墓制のみならず中央政権との関係においても、天草諸島北部地域は九州島側の八代平野部と並ぶ地域となるのである。

そうした天草諸島北部地域は上島北東海岸よりも北の地域であるから、私はかつてその場所を「大矢野・松島地域」と表現した（杉井2007：p. 337）。しかし、古墳の共通性をみると、これに宇土半島西半部の三角地域を含めて「三角・大矢野・松島地域」とした方がよりふさわしいかもしれない。

ここで注意すべきなのは、八代平野北部沿岸地域の全体がすべて同じような様相を示しているわけではない点である。たとえば、石障系横穴式石室については、三角・大矢野・松島地域および八代平野南部地域に分布が集中する（柳沢1980, 高木恭1994, 藏富士1997, 古城2007）。帯金式甲冑も同様の傾向を示す。一方、川西編年Ⅳ期の埴輪については、本書第Ⅱ部で報告した天草諸島北部地域のカミノハナ1号墳をのぞくと、宇土半島基部地域に分布が集中している（杉井2006b）。ただし、考慮されるべきであると思うのは、宇土半島基部地域とはいっても古墳時代前期に有力な前方後円墳が築かれた場所とはやや異なる地点に埴輪を有す遺跡や古墳が立地することである。本書第Ⅲ部で報告した松橋前田遺跡やそれにごく近い松橋大塚古墳は、宇土半島の基部にある幅狭い通路状の低地部を南に抜けた地点にあり、通路状の低地部を臨むような丘陵上に位置していた前期古墳とは明らかにその立地が異なっているのである。

こうした様相をみると、古墳時代中期には、宇土半島の基部を南北に抜けるルートの地位が相対的に低下した可能性が想像される。一方、松橋前田遺跡A地点出土埴輪の特徴から判断すれば、緑川中流域の塚原古墳群に築かれた琵琶塚古墳（杉井2006a）との関連がうかがえるから、その両者を結ぶルートの存在が想定される。つまり、有明海側と八代海側を結ぶルートとして、緑川中流域と八代海北東隅の沿岸部を直接結ぶルートの重要性が高まった可能性が考えられるのである。

別稿に記したことであるが、有明海側でも、古墳時代中期中葉になると、合志川沿いを南北につたう内陸ルートの重要性がきわめて高まると思われるが（杉井2009予定）、宇土半島基部地域周辺にみられる以上のような新たな交通ルートの整備は、たんなる地域内の動きにとどまるものではなく、古墳時代中期の列島全体における政治動向と密接に関連するものと思われるのである。

なお、ここまで古墳時代中期とのみ記してきたが、石障系横穴式石室や帯金式甲冑、窖窯焼成の埴輪などの動向をみれば、八代海北部沿岸地域における大きな画期は古墳時代中期中葉にあるとみることができる。この点にかんしては、今後もさらに検討していきたいと思う。

古墳時代後期の八代海沿岸地域 古墳時代後期にかんしては十分な検討ができていないが、1つ重要であると思うのは、天草諸島南部地域、すなわち「上島南半以南地域」（杉井2007：p. 337）において横穴式石室墳の築造が開始されることである。一方、九州島側における横穴式石室墳の分布はおよそ八代平野までにとどまっており（ただし最南は芦北町海浦の鬼塚古墳）、中期以前の状況と変わらない。こうしたことからうかがえるのは、八代海の南に位置する出水平野や川内平野へ向かうルー

トとして、天草諸島づたいに南へ進む海上ルートがより重視された状況である。

これ以外では、石棚や石屋形を有す横穴式石室の分布が石障系横穴式石室とは大きく異なる点が注意される（藏富士2002）。すなわち、天草諸島北部の三角・大矢野・松島地域には分布がみられず、また八代平野南部地域では分布が希薄になるのに対し、宇土半島基部から八代平野北部（氷川下流域）にかけての地域で石棚や石屋形を有す横穴式石室の分布が密になるのである。また、天草諸島南部の上島南半以南地域にも石棚を有す横穴式石室（天草市大松戸古墳）が出現する。あたかも古墳時代中期に石障系横穴式石室を構築していた地域を避けるような分布状況であるが、この理由についてはよくわからないというのが正直なところである。

千崎型箱式石棺 古墳時代前期後半から中期の八代海北部沿岸地域を特徴づける要素として、きわめて精緻に造られた砂岩製の箱式石棺をあげることができる。本書第IV部の島津屋論文で「千崎型箱式石棺」と呼ばれたものであるが、今一度その特徴を整理すれば、①天草産砂岩製である、②長側石と小口石の組み合わせ方はH字形タイプであり、しかも長側石の小口石と組み合わせる部分には溝状加工が施される、③長側石の継ぎ方はカギ状タイプである、の3つにまとめられる（本書139頁）。

上天草市千崎古墳群やその周辺に多くみられるものであるから、その古墳群名を冠した型式名が与えられたのであるが、棺蓋内面の棺身上端面と接する部分にも溝状加工が施されるなど、密封することをつよく意識した造りの石棺であることは明らかである。また、チョウナ削りやチョウナ叩きによるていねいな加工が施されていることも注目に値する（三好・仙波編2007、山野・有馬編2008、一本・高濱編2009）。なぜなら、砂岩をていねいに加工して組み合わせるという造作は石障と共通するものであるからである。すなわち、千崎型箱式石棺は、石障系横穴式石室の発生を考えるうえできわめて重要な位置を占めていると予想されるのである。

石障系横穴式石室の発生 石障系横穴式石室の発生についてはこれまでもさまざまな議論がなされてきたが、近年は、八代海沿岸地域内における墓制の発達過程のなかでそのメカニズムをとらえようとするものが主流であるように思う。もっとも明確にそれを示したのは高木恭二で、地下式板石積石室墓との関連をとくに重視する。すなわち、「石障発生の重要な要素としては地下式板石積石室墓の周壁の板石が考えられ」、また「穹窿状の天井は地下式板石積石室墓と竪穴式石槨に起源が求められる」とするのである（高木恭1994：p. 128）。そして、もっとも古い石障系横穴式石室とみなす八代市小鼠蔵1号墳の石室壁体に用いられた安山岩と、水俣市周辺の地下式板石積石室墓に用いられた安山岩が同じものであることを示し、石障系横穴式石室と地下式板石積石室墓のあいだには密接な関係があることを論じた（同：pp. 126-128）。

高木によるこうした観点はきわめて重要で、なかでも小鼠蔵1号墳の石室石材にかんする分析は傾聴に値する。ただ、1つ理解に苦しむのは、初期の石障は平滑に仕上げられた砂岩をていねいに組み合わせることによって形成されており、地下式板石積石室墓の基底部をなす板石とはその様相が大きく異なる点である。むしろ、石障石材（砂岩）の加工の様子やその組み合わせ方などは、千崎型箱式石棺のそれにきわめて近い。

こうした箱式石棺との関連を重視する視点は、藏富士寛によって提示されている。藏富士は、「石障の起源を考えるのであれば、成合津2号墳にみられるような、竪穴式石槨内に収められた箱式石棺を想定することができよう」と述べるのである（藏富士1997：p. 158）。

成合津2号墳とは、天草諸島北部の大矢野島北西部に位置する円墳である（図5-5、本書10頁）。主体部は長さ1.95m、幅1.0mの竪穴式石室で、その内部には内法の長さ1.55～1.57m、幅67～71cm

の箱式石棺が納められている。箱式石棺には当初から蓋石が存在しなかったと推定されており、また、石棺に用いられた石材は1枚をのぞいて砂岩であると報告されている（阿部ほか1977）。つまり、これに横口を付加すれば、石障系横穴式石室に類似した形態となるわけで、したがって、高木恭二も自身の「石障系横穴式石室の成立過程」と題した編年図のなかで、成合津2号墳を小鼠蔵1号墳の直前に置いているのである（高木恭1994：pp.122-123）。ただし、藏富士が高木と大きく異なるのは、石障系横穴式石室の発生にかんして地下式板石積石室墓の影響を考慮していないと思われる点である。どちらかという、今の私は藏富士の見解に近い。

そのもっとも大きな理由は、石障と地下式板石積石室墓の基底をなす板石とのあいだには、解消しがたい懸隔があるからである。地下式板石積石室墓よりも千崎型箱式石棺との関連を検討した方がいいのではなかろうか。また、石棺を石室で覆うという行為自体も、八代海北部沿岸地域、あるいはその周辺で発生した可能性を検討する必要がある。その1つの事例が上述の成合津2号墳であるが、そのほかに、すでに破壊され現存していないが宇土市チャン山古墳の石室も検討に値すると思う（杉井2002a）。チャン山古墳と石障との関連については先に川西宏行によって注目されているが（川西2008：pp.315-316）、それは残存長4.2mの竪穴式石室で、残された写真や図面によれば、石室壁体の前面には板石が立てられていた様子がうかがえる。つまり、通有の竪穴式石室の内部に箱式石棺状の施設が設置されていた可能性が考慮されるのである。

問題は、横口を設けるという発想がどこから生まれたのかであるが、これについては北部九州との関連を考えてもよいのではなかろうか。現に、高木恭二もそのように考えているようであるが（高木恭1994）、これを検討するうえで参考となるのは、上天草市千崎10号墳や18号墳の箱式石棺、またそのすぐ南に位置する桐ノ木尾ばね古墳の竪穴式石室から検出された人骨である。中橋孝博の分析によると、それらはいずれも高身長で、北部九州の渡来系弥生人やその影響を受け継いだ古墳人と同じ形質的特徴をもつという（中橋2006a・2006b・2007）。つまり、少なくとも、天草諸島北部地域の千崎古墳群や桐ノ木尾ばね古墳に葬られたのは、土着の集団とは異なる遺伝子を受け継いだ人物であったことがうかがえる。このことは、天草諸島北部地域が北部九州との密接な関係を有していた可能性を暗示するのである。ただし、こうした身体的形質がどの時代に形成されたのか、あるいは八代海北部沿岸地域にどの程度拡散していたのかなどについては、今後の重要な検討課題である。

石障系横穴式石室の発展 近年では、八代市小鼠蔵1号墳の石室が最古の石障系横穴式石室であるとされ、その次の段階に八代市大鼠蔵尾張宮古墳の石室が置かれることが一般的である（高木恭1994、古城2007）。しかし、この両者のあいだにはスムーズな型式変化ではとらえきれない相違があると私には感じられ、その点をどのように理解すべきなのか大いに頭を悩ませている。

まず、両者の出入口であるが、小鼠蔵1号墳の石室では玄室床面との高低差が1.2mもある高い位置に横口が開口しており、現状でみるとその部分の石積みはきわめて乱雑である（図72-1）。それに対し、大鼠蔵尾張宮古墳の石室では、前障よりもやや高い位置に開口しており、ていねいに石積みされた袖部の上に天井石が置かれ、明確な羨道を形成している。その羨門は板石によって閉塞されている（図73-1）。このように、これら両石室の出入口にみられる相違はあまりにも大きい。

また、石障内部に配される遺体安置施設についても明確な相違が存在する。小鼠蔵1号墳では、石障の中央に蓋石を有す箱式石棺が配置されるのに対し（図72-6）、大鼠蔵尾張宮古墳では、中央を通路としその両側に遺体を安置するという川の字形の屍床配置となるのである（図73-2）。とくに、蓋石を有す箱式石棺である点に、小鼠蔵1号墳の特異性が表れている。

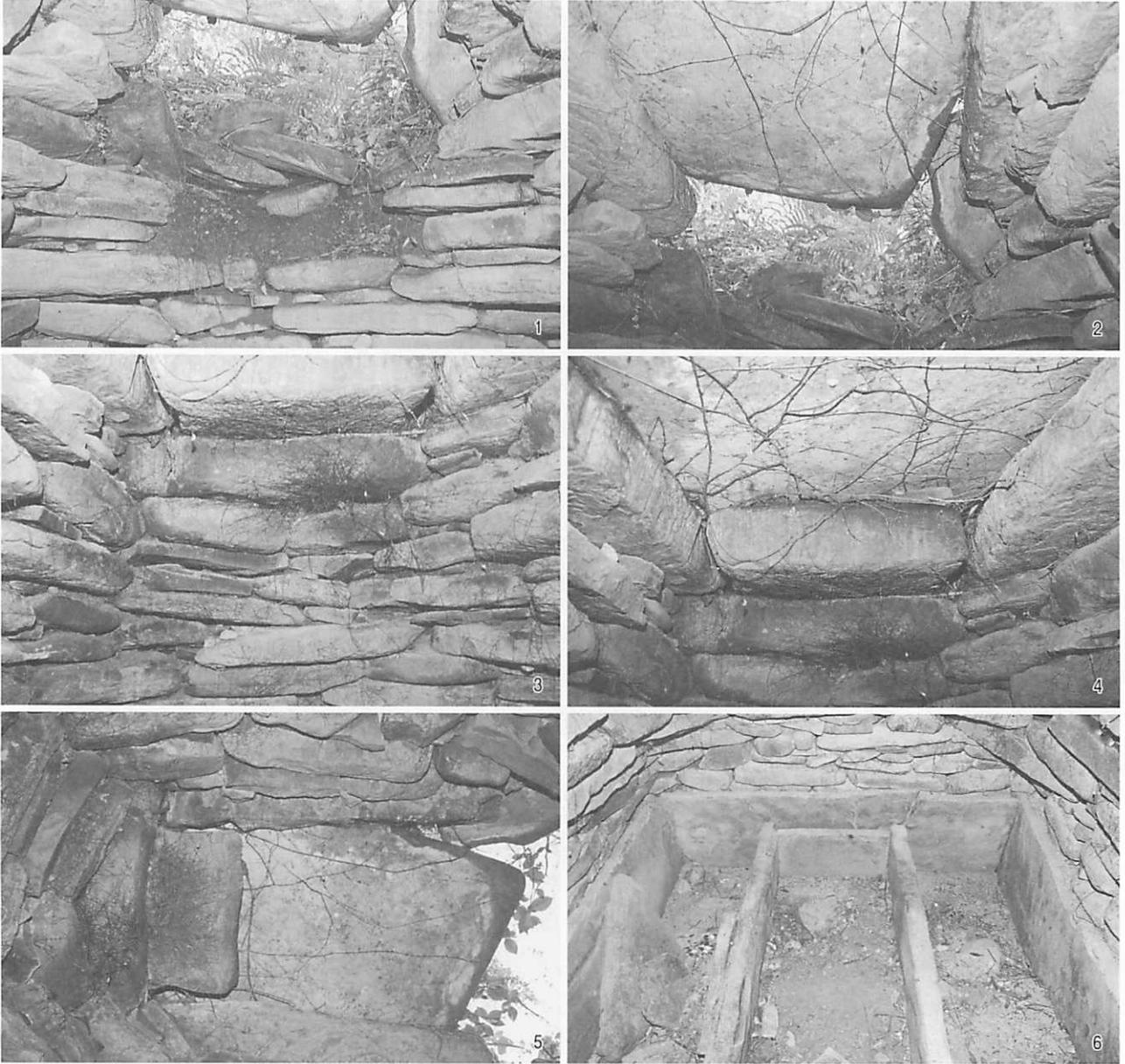


図72 小鼠蔵1号墳の石室

1：横口部（東小口部），2：横口部と天井石，3：西小口部，4：西小口部と天井石，
5：天井石，6：石障と箱式石棺（西小口部）



図73 大鼠蔵尾張宮古墳の石室

1：前壁と美道，2：奥壁と石障

このような大きな相違がある両石室を、直接の型式変化のなかでとらえることはきわめて難しいように感じる。もし両石室を直接の系譜でつなぐとすれば、それらのあいだの変化にはきわめて大きな飛躍が生じたことを想定せざるを得ない。

今の私に成案はないが、1ついえることは、小鼠蔵1号墳の横口部の構造について詳細な調査が必要があるということだ。幾度か現地で横口部を観察したのだが、組み合っていた壁体石材が抜き取られたように思える箇所も存在する。当初からの横口部であったとすれば、石室壁体をなす石材と横口部に充填されていた石材が組み合っているというのはどうも不自然である。また、石室の天井石も原位置から若干動いているようで（図72-5）、小鼠蔵1号墳の石室に後世の改変が加わっている可能性を完全に排除することができない。横口部とみられる箇所の前面に、前庭部となるような掘り込みがあるのかどうかなどを確認するための調査が、今後ぜひなされる必要があると思う。

装飾古墳 石障系横穴式石室と並んで八代海北部沿岸地域を特徴づけるものに装飾古墳がある。装飾古墳については多くの研究成果が蓄積されているが、発表から45年が経過した現在でも小林行雄による分類（小林1964）の有効性はまったく失われていない。それは装飾古墳を石棺系、石障系、壁画系、横穴系の4つに分類するものだが、古墳時代中期の八代海北部沿岸地域にかんしては、石棺系と石障系の関係を検討することが大切である。

ここでまず注意すべきであると思うのは、石棺系装飾古墳は、その装飾が石棺の外面に描かれるものと内面に描かれるものの2つに区分される点である。このことについては、すでに高木正文によって注目されており（高木正1999：p. 100）、また、高木恭二によって石棺の内面に文様を描くという手法が八代平野部で発生した可能性が説かれている（高木恭2002：p. 198）。

石棺系装飾古墳の文様施文箇所が、石棺の外面であるのか内面であるのかは、箱式石棺と石障系横穴式石室との関係を考察する際には、きわめて重要な論点となる。なぜなら、藏富士寛が強調するように、石障系装飾古墳における施文箇所は「石障や仕切石、玄門部の立石などと極めて限定的であり」（藏富士1999：p. 91）、なかでもとくに石障の内面に主要な文様が描かれる点は、石棺の内面に文様が描かれることと共通する現象であると思うからだ。つまり、箱式石棺と石障系横穴式石室とのあいだに密接な関係があることを裏付ける事実となるのである。

今ここで、石棺系装飾古墳にみられる2者を「外面加飾タイプ」および「内面加飾タイプ」と名付けておくが、外面加飾タイプは刳抜き式石棺との、内面加飾タイプは組合せ式石棺との対応関係を有している。また、あらためて述べるまでもないことだが、内面加飾タイプには砂岩製の箱式石棺が多く含まれる。さらに、石障石材と文様との関係に注目すれば、砂岩製の石障には円文などの具象文様が、他方、阿蘇溶結凝灰岩製の石障には直弧文などの幾何学文様が描かれる傾向がある。すなわち、砂岩製の箱式石棺の内面にも円文などの具象文様が描かれているから、砂岩という石材を共通にする箱式石棺と石障とのあいだには、そこに描かれる文様の内容においても共通性が認められるのである。今後、こうした点についてもさらに詳細な分析を行いたいと考えている。

帯金式甲冑と埴輪 古墳時代中期における八代海北部沿岸地域の古墳動向を考察するうえで、帯金式甲冑や鉄鏃、埴輪などは、中央政権との政治的関係を明らかにするためにはきわめて重要な遺物である。それらのうち帯金式甲冑と埴輪については、本書第IV部で個別研究の成果が提示された。ここでその内容を繰り返すことはしないが、興味深いのは、帯金式甲冑と川西編年IV期の埴輪の分布に相違がみられる点である。すでに上述したことだが、現在の資料によるかぎり、宇土半島基部地域においては帯金式甲冑の出土をみないのである。他方、本書第IV部の竹中論文でも指摘されているよう

に、樹立古墳は不明ながらも宇土市石ノ瀬遺跡（杉井2002b）や轟貝塚（杉井2002c・2006b）でⅣ期の埴輪が検出されている。一方、南に目を転じれば、帯金式甲冑の出土が知られる八代平野南部地域ではⅣ期の埴輪がみられないのである。こうした分布傾向の違いは何を意味するのか。有明海側の動向も含めて、今後検討されなければならない問題である。

生産活動 最後に、八代海沿岸地域における生産活動について簡単に触れておきたい。

まず、1つ目は天草式製塩土器による塩生産である。これについては藤本貴仁による近年の研究（藤本2004・2007）によってその実体が徐々に解明されつつあり、本書第Ⅳ部にもその研究成果の一部が提示された。天草諸島の下島北岸で製塩土器による塩生産が開始されたのはTK208型式期を前後する時期とみられるが、これは本書第Ⅱ部で報告したカミノハナ古墳群の形成時期と一致する。しかし、土器製塩が行われる下島北岸は、天草諸島南部地域、すなわち上島南半以南地域に含まれ、石障系横穴式石室や装飾古墳がさかんに築造されていた三角・大矢野・松島地域とは別の地域である。こうした2つの地域のあいだにはどのような関係があるのか、また、なぜこの時期にその場所で土器製塩が開始されたのかについては十分に解明がなされていない。今後の重要な検討課題である。

生産活動でもう1つ注目されるのは、宇城産須恵器の動向である。これにかんしては、本書第Ⅳ部の木村論文で若干検討されたが、1つの古墳に供給される須恵器の生産地をさらに詳細に検討・分類することができれば、古墳時代中期から後期の八代海北部沿岸地域周辺における小地域間の関係をより具体的に描き出すことができる可能性がある。今後に大いに期待したい研究課題である。

おわりに

「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究」と題した共同研究を、おもに熊本県内の考古学研究者とともに進めてきたのだが、当初の目的をどの程度達成できたのかについては、はなはだ心許ない。しかし、基礎資料を整理し公開するという研究のもっとも根幹をなす部分については、一定の成果を提示できたのではないかと考えている。鉄鏝にかんする個別研究を掲載できなかったことは少し残念であるが、それについては今後に期したい。

熊本県地域の古墳にかんしては、石棺や横穴式石室、装飾古墳などの存在があまりにも大きいせいか、遺物についての研究がやや不足していると感じている。そういった面にも気を配りながら、本共同研究の成果をもとにして、今後も地方における考古学調査・研究のありかたを模索していきたいと思っている。

引用・参考文献

- 阿部堅二・今井義量・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島 格 1977「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号 熊本史学会：pp. 19-40
- 池田栄史 1982「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』第2号 肥後考古学会：pp. 96-103
- 池田栄史 1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号 九州考古学会：pp. 93-112
- 一本尚之・高濱美来編 2009「千崎古墳群第7次調査報告」『考古学研究室報告』第44集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-28
- 乙益重隆 1980「石障系石室古墳の成立」『國學院大學大学院紀要』第11輯 國學院大學大学院：pp. 31-60
- 角田政治 1918「三角町の古墳」『熊本縣史蹟調査報告』第壹回 熊本縣教育會史蹟調査部：pp. 21-23
- 加藤一郎 2008「九州南部における埴輪の伝播と受容－唐仁大塚古墳表採資料の紹介をかねて－」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館：pp. 233-242

- 川西宏幸 2008『倭の比較考古学』同成社
- 河野法子 1982「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第2号 肥後考古学会：pp. 42-58
- 藏富士寛 1997「石屋形考－平入横口式石棺の出現とその意義－」『先史学・考古学論究』Ⅱ 熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集 龍田考古会：pp. 133-166
- 藏富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集 龍田考古会：pp. 87-103
- 藏富士寛 2002「石棚考－九州における横穴式石室内棚状施設の成立と展開－」『日本考古学』第14号 日本考古学協会：pp. 21-36
- 小林行雄編 1964『装飾古墳』平凡社
- 杉井 健 2002 a 「チャン山古墳」『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建造物・民俗 宇土市：pp. 170-172
- 杉井 健 2002 b 「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建造物・民俗 宇土市：pp. 179-185
- 杉井 健 2002 c 「轟遺跡（貝塚）」『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建造物・民俗 宇土市：pp. 201-202
- 杉井 健 2006 a 「琵琶塚古墳再考」『文学部論叢』第89号 熊本大学文学部：pp. 1-27
- 杉井 健 2006 b 「熊本大学所蔵の熊本県宇土市轟貝塚出土円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第10号 埴輪研究会：pp. 145-150
- 杉井 健 2007「古墳時代の矢野」『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1 上天草市：pp. 123-345
- 杉井 健 2009予定「マロ塚古墳出現の背景」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 国立歴史民俗博物館
- 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp. 109-132
- 高木恭二 2002「九州の装飾古墳」『東アジアと日本の考古学』Ⅱ 墓制② 同成社：pp. 189-220
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp. 97-150
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会
- 中橋孝博 2006 a 「熊本県上天草市維和島・千崎古墳群出土の古墳時代人骨」『上天草市史大矢野町編資料集』2 上天草市：pp. 85-93
- 中橋孝博 2006 b 「熊本県上天草市維和島・桐ノ木尾ばね古墳出土の古墳時代人骨」『上天草市史大矢野町編資料集』2 上天草市：pp. 94-97
- 中橋孝博 2007「天草の古代人」『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1 上天草市：pp. 353-357
- 藤本貴仁 2004「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 33-49
- 藤本貴仁 2007「熊本県域における古墳時代の土器製塩について」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会：pp. 317-324
- 古城史雄 2007「肥後の横穴式石室について」『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』日本考古学協会2007年度熊本大会実行委員会：pp. 35-55
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007「千崎古墳群第5次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』3 上天草市：pp. 1-36
- 柳沢一男 1980「肥後型横穴式石室考－初期横穴式石室の系譜－」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会：pp. 465-497
- 山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36